

## 幼児の自発的な動きを引き出す遊具に関する事例研究 ～多様な用具特性を持つバランス遊具「ビリボ」に着目して～

古屋朝映子\*

### A Case Study of the Play Equipment that Elicit Voluntary Movements of Young Children -Focusing on “Bilibo” -

FURUYA Saeko\*

#### 1. 緒言

幼児を取り巻く社会環境の変化による体力低下の問題を受け、文部科学省は2012年3月に幼児期運動指針<sup>1)</sup>を策定した。指針では、「幼児期における運動については、適切に構成された環境の下で、幼児が自発的に取り組む様々な遊びを中心に体を動かすことを通して、生涯にわたって心身ともに健康的に生きるための基礎を培うことが必要である。また、遊びとしての運動は、大人が一方的に幼児にさせるのではなく、幼児が自分たちの興味や関心に基づいて進んで行うことが大切であるため、幼児が自分たちで考え工夫し挑戦できるような指導が求められる。」とされている。また、上記の内容を推進するに当たり、「友達と一緒に楽しく遊ぶ中で多様な動きを経験できるよう、幼児が自発的に体を動かしたくなる環境の構成を工夫すること」の必要性が述べられている。この指針では、幼児期における運動が、多様な動きから成る遊び（以下、運動遊びとする）であることの重要性および、そのために環境の構成を工夫することの必要性が述べられている。

現在、保育所や幼稚園といった幼児教育現場においては、運動遊びという名称のもと、様々な取り組みがなされている。しかし、上記のように、幼児が自発的に行う運動遊びの重要性が示されているにも関わらず、先行事例の多くは、「何かをやらせる」プログラムが多いのが現状である。杉原<sup>2)</sup>は、運動指導を取り入れている幼稚園の方が、取り入っていない園に比べて、幼児の運動能力が低いという研究結果を発表しており、その原因として、運動の一斉指導の弊害を指摘している。具体的には、運動が一斉指導のかたちで指導されることにより、運動の

多様性や実質的な運動時間が減少すること、決められた運動を一方的に繰り返しやらされるため、運動遊びに対する子どもの意欲が低下してしまうことが挙げられている。この結果は、運動指導そのものの是非というよりも、運動指導の内容を吟味する必要性を問うていると考える。

ところで、「幼児が自発的に体を動かしたくなる環境」において運動遊具は大切な役割を担っている。幼児が自発的に様々な運動遊びを展開できる運動遊具の条件として、先行研究では適度のリスクを備えていること、多様な遊びを展開できること<sup>3)</sup>が挙げられている。筆者は、「適度のリスク」は運動遊具の不安定性（＝アンバランス）にあると考え、遊び方が決まっておらず、多様な用具特性を持つ「バランス遊具」である、ビリボ（MOLUK社、スイス）に着目した（写真1参照）。ビリボは、高密度ポリエチレン製の遊具で、耐加重100kgのため、中に入ったり上に乗ったりと、様々な遊びを展開することができる。また最大の特徴は、取り扱い説明書等で遊び方を限定しておらず、使用者自らが使用方法を創造することを重視しているところである。

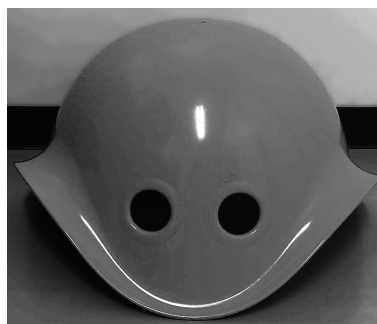


写真1 ビリボ

\* 筑波大学体育系  
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

本研究では、遊び方が決まっておらず、多様な用具特性を持つ「バランス遊具」であるビリボを使用し、幼稚園の5歳児クラスにおいて、できるだけ一斉指導を行わない形式でビリボを使用した運動遊びを実践した。ビリボを使用した運動遊びにおいて、幼児が好む動きがどのようなものであるのかについて明らかにすることを、本研究の目的とした。本研究は、一遊具の実践例であるが、幼児の遊びに対する嗜好性を把握することは、幼児が自発的に行う運動遊びプログラムの構築をする上で、必要不可欠なことであり、本研究結果はその一端を担うものであると考える。

なお、本研究結果は、現在、学会誌に投稿中につき、概要のみを報告する。

## 2. 方法

### 2.1 対象

茨城県内にある私立幼稚園の5歳児1クラス32名（男児17名、女児15名）を対象とした。

### 2.2 活動の手続き

活動は、2012年6月25日に幼稚園内の体育館で実施した。

対象クラスの幼児に対し、1人1つのビリボを与え、15分間ビリボを使って自由に活動させた（全体の活動時間は25分間）。対象児には、事前に「ビリボは、遊び方が決まっていない遊具であること」のみを伝え、一方的な遊び方の教示は行わなかった。安全管理上、事前に「お約束事」として、使用上の注意点を伝えた。

活動には、筆者以外に研究補助の大学院生1名および、担任保育士2名（いずれも女性）が参加した。できるだけ幼児の自発的な活動を促すため、遊び方の教示は行わず、幼児の遊びに寄り添い、かつ危険要因の排除に務めた。

### 2.3 分析の手続き

活動中の対象児の様子をデジタルビデオカメラ3台にて、3方向より撮影した。活動児32名のうち、記録映像から活動内容が途切れる事なく抽出できた者29名（男児16名、女児13名）を分析対象とした。撮影した映像の分析には、ゲームブレイカー・プラス（スポーツテック社）を使用した。また、参与観察によるフィールドノーツを作成し、分析の補助資料とした。

#### a. カテゴリー分類

撮影した映像をもとに、活動時間中に出現したビリボの「遊び方」に関して、ビリボの使用形態の観

点から、カテゴリーに分類した。

#### b. カテゴリー内容の比較

aにおいて分類されたカテゴリー毎に、実施人数、各分析対象者における表出時間（秒）を算出した。各カテゴリーにおける表出時間に関して、カテゴリー間の比較を行なった。統計処理にはMann-WhitneyのU検定（Bonferroni補正有）を適用し、統計的有意水準は5%とした。また、各カテゴリーにおける全分析対象者の表出時間の総和を、性別毎に合計表出時間として算出した。

## 2.4 倫理的配慮

本研究では倫理的配慮を以下の通りに行った。撮影に際しては、調査対象となる幼稚園園長に対して書面にて研究目的および方法、プライバシーの保護を遵守する旨を説明し、書面にて同意を得た。分析に際しては、撮影された個人が特定できないように留意した。

## 3. 結果

活動時間中に出現した「遊び方」に関して、ビリボの使用形態の観点からカテゴリー分類を行なったところ、4つのメインカテゴリー（バランス系・回転系・移動系・遊具操作系）と14つのサブカテゴリーに分類することができた。

14個のサブカテゴリーのうち、一人当たり平均  $7.2 \pm 1.6$  個の遊び方が観察された。

各分析対象者における表出時間をメインカテゴリー間で比較した結果では、移動系の遊びがそれ以外（バランス系・回転系・遊具操作系）と比べて有意に少なかった。また、回転系の遊びとバランス系の遊びを比較した場合、回転系の遊びの方が有意に多かった。

全体では自身の回転を伴う遊び（回転系）と遊具を操作する遊び（遊具操作系）が好まれる傾向にあることが明らかとなった。性別ごとの各サブカテゴリーにおける合計表出時間の結果もふまえると、回転を伴う遊びでは、男女ともにビリボの中に座って回転する遊びが最も多く観察された。遊具を操作する遊びでは、男児において、ビリボを揺らしたり回したりする遊びが多く観察され、男女ともに、ビリボを何かに見立てて遊ぶ姿も多く観察された。

## 4. 結論

本研究では、幼稚園の5歳児32名を対象とした15分間のビリボを使用した運動遊びにおいて、幼児がどのような遊び方を好むかについて検討した。その結果、活動時間中に出現した「遊び方」は、バ

ランス系・回転系・移動系・遊具操作系の4つのメインカテゴリーおよび14つのサブカテゴリーに分類でき、様々な遊び方が観察された。また、全体では自身の回転を伴う遊び（回転系）と遊具を操作する遊び（遊具操作系）が好まれる傾向にあることが明らかとなったが、性別で比較すると、好まれる遊び方には違いがある可能性が示唆された。

本研究は、5歳児に限定したビリボ一遊具での単一事例の報告であるため、今後は他の年齢および他の遊具での調査が望まれる。また、余談ではあるが、自発的な運動遊び環境の構築のためには、安全に対する配慮の視点が必要不可欠であるため、安全管理の観点を含めた検討も行ないたい。

## 謝 辞

本研究は平成23年度体育科学系研究プロジェクトの支援のもと実施された研究である。ここに記して感謝の意を示す。

## 文 献

- 1) 文部科学省（2012）：幼児期運動指針について。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/undousisin/1319192.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319192.htm)（2012年12月1日）。
- 2) 杉原 隆（2008）：運動発達を阻害する運動指導。幼児の教育、107（2）：16-22。
- 3) 高橋信行（2005）：遊具の安全性について考える～遊具は「安全な危険」を提供します!?. 教育ジャーナル 2005、1月号：52-55。